特250
134

（方面時報號外）

新潟市內少額所得者の衛生狀態

新潟市社會課

始

特250
134

本誌は昨年の十一月から新潟醫科大學衞生學教室關係の諸君と本市の方面委員諸君とが及川博士の下に約一ヶ月に亘り市内各方面の少額所得者約千七百世帶につき苦辛を重ねて調査せられた結果の報告で學術上貴重な許りでなく本市の衞生政策に多大の貢獻を與ふるものと信じます玆に印刷に付するに當り及川博士を始め調査に從事せられた各位に感謝を表する次第であります

昭和二年六月

新潟市社會課

新潟市在住少額所得者の衞生狀態に就いて

新潟醫科大學衞生學教室　醫學博士　及川　周

寄贈本

大正十五年十一月六日以降約一ヶ月に亘つて行つた新潟市少額所得者の衞生調査は山添氏、布川氏並びに方面委員諸氏の非常なお骨折によつて極めて圓滑に終了する事が出來た。私共にとつては實に興味ある調査であつた。以下述ぶるところはその結果の大要である。

調査の對象として上つた世帶の總數は二、一三五でこの中實際調査の出來たのは一、六九八。此總人員八、〇一二人。殘りの四三七世帶は移轉先不明とか何度訪問しても留守であるとかいふ事情で調査の出來なかつたものである。尚方面委員の御見込で調査不要と認めて削除したものもこの中にある。

卽ち前述の如く世帶總數一、六九八。總人數八、〇一二人。一世帶平均人數四・七人である。但し實際問題として一世帶人數の最頻値は五人である。

過去一ヶ年間に於ける死亡者總數一三三人。千人に對する死亡率は一八・二であつて、この値は新潟市全体（大正十四年度）の死亡率二〇・五。又は全國（明治四十一年——大正二年）の死亡率二〇・六に比べて大きいとは云はれない。過日東京市社會局で行はれた東京市在細民の衞生調査では總人數三二六、五八六人に就き、

千人に對する死亡率は一九・六三であつて、これも私共の場合とほゞ似た値である。然しこの死亡率に關して一歩深く考察を進めてみると細民階級と普通一般の階級との間には種々興味ある差違を認めるのであつて、これは後に述べる。

扨て次に現在罹患者の總數は五九四人。千人當り八三・四の現在罹患率である。この値は大正七年東京市本所、深川の貧民窟に於ける輝峻氏の調査結果千人に就き三九〇・七よりは遙かに小さいが、大正十四年新潟市に於ける山添氏の調査七二・五とは近似して居る。要するにこの率の値の差違は階級の分け方、範圍及び調査せし季節等に重大なる關係をもつてる樣である。

これからだん〳〵死亡者並びに罹病者について、細かな觀察に入つて行かふ。

過去一ケ年の死亡者を病氣の種類及び年齢によつて分類してみると次表の樣になる。

死亡者病別並年齢別

年齢＼病種	消化障害	消化器病	腦膜炎	乳兒脚氣	呼吸器病	卒中	腎臟病	心臟病	災害	雜	計
〇―一〇	十二	〇	十三	四	八	〇	二	三	二	十六	六〇
一一―二〇	〇	〇	一	〇	二	〇	〇	〇	〇	二	五
二一―三〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	二	三
三一―四〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	一	一	一	四
四一―五〇	〇	一	〇	〇	五	一	二	一	二	二	十四
五一―六〇	〇	三	〇	〇	二	一	〇	〇	〇	二	八
六一―七〇	〇	一	〇	〇	三	四	一	〇	〇	二	十一
七一―八〇	〇	一	〇	〇	一	三	〇	〇	〇	七	十二
八一―	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	五	六
計	十二	六	十四	四	二十三	十	五	五	五	三十九	一二三

表中特に目につくのは十歳未滿の小兒の死亡數の著しく多いことで、全死亡者數の約五〇プロセントを占めてをる。前述の東京市社會局の細民調査では二歳未滿のものだけで全死亡數の二八プロセントとなつてをるから十歳未滿のものについて調べたら矢張り可成りの高率を示すであらう。これを日本の全階級を通じた同樣の比率三八プロセントとに比べると、はるかに大きいのである。尤もこの比率の値は、細民階級に於ける年齢別人數の配分狀態を考に入れてゐないから統計的價値は小さいが、實際問題として對策を講じやうなど云ふ場合には可成り大きな意義を語るものであると思ふ。

扨て其の小兒の死亡の中で特に多數なのは、消化障害によるものである。尙腦膜炎によつて死亡したと稱せらるゝものも、實際は其大部分が消化障害より來た腦膜炎症狀であることは、小兒科專門家の認むるところであるから、この事を考に入れると大多數の幼兒は消化障害で仆れることになる。この事實はひとり細民階級にのみ限つたことではないが、この場合はそれが一層ひどい樣である。この原因は奈邊にあるか。彼等の生活狀態の極めてわるいのにもよること勿論であらうが、恐らくこれが主因は彼等の育兒に關する無智、特に乳兒が

普通食に移行する際の營養に關する無關心に在ると思はれる。この點はよく當事者の考に入れて置いて頂きたい事である。

も一つ呼吸器病に就いて一言したい。同じ呼吸器病と云つても年齢によつて其内容は大いに違ふ。幼兒に於けるものは大抵肺炎であるが、壯年者に於けるものは殆んど全部が肺結核である。肺結核患者の死亡率がその生活狀態の如何によつて非常に異る事は明白である。少額所得の人達は此の點に於ても甚だ惠まれないわけである。

次に現在罹病者に就いて病別並に年齢別に從つて調べて見やう。

罹病者病別並に年齢別

病種＼年齢	〇―一〇	一一―二〇	二一―三〇	三一―四〇	四一―五〇	五一―六〇	六一―七〇	七一―八〇	八一―	計
眼疾	29	17	7	31	30	19	19	10	1	163
内失明セルモノ		1	4	23	24	15	16	10	1	97
消化障害	9	0	0	0	0	0	0	0	0	9
消化器病	0	0	3	7	4	1	0	3	0	18
リューマチス	0	1	4	9	10	8	5	2	1	40
神經痛	0	0	2	2	3	3	1	1	0	12
精神病	2	7	1	7	11	0	0	0	0	28
呼吸器病	9	2	3	5	7	3	3	4	1	37
心臓病	2	0	1	5	2	3	4	1	0	18
腎臓病	2	0	3	4	1	0	1	0	0	11
脚氣	0	1	1	9	6	2	2	1	0	23
半身不隨	0	0	1	1	3	2	8	6	1	22
感冒	10	1	2	11	1	2	0	0	0	27
災害	5	1	3	6	5	2	1	1	0	24
婦人病	0	0	2	5	2	2	0	0	0	11
耳疾	8	0	1	2	1	1	0	5	1	19
雑	36	8	5	14	11	7	1	0	0	81
計	112	38	39	118	97	55	45	34	5	543

右表によつて明らかな樣に眼疾、リューマチス、感冒等俗に貧民病と呼ばれてをるもの乃至家屋の狀態に密接な關係を有すと考へられてをる病氣が著しく多いのである。その他特に注目すべき事實は災害によるものゝ比較的多いことであつて、これが幼兒と壯年者に於て殊に著しいのは、一は兩親が幼兒に對し充分なる注意をなし得ないことを示し、一は彼等の大部分が勞働者であつて常に危險に面しつゝ働いてをることを示すものである。

話は前に戻るが眼疾に就いて少しく考へて見たい。この階級に眼疾患者の多いことは實に驚くべきものがある。かつて東京本所一帶の地域に就いて調査せられた結果でも眼疾は全數の四分の一を占めてをる、この中で最も多いのはトラホームである、失明者の多いことも甚だ悲慘であるがこれの大部分は若い時の花柳病によるものであると眼科專門家は云つて居る。貧の原因の一部がこんなところからも覗き得られる樣に思ふ。

それから白痴、低能、早發性癡呆、痲痺性癡呆等の精神病者の多い事も殊に彼等の階級では注意すべきこと

であると思ふ。精神衛生（メンタルハイヂン）の漸く高潮せられかけて來た今日、これに對する策の如何は學問上からも興味がある
扨て如上の病人がどんな手當をうけてをるであらうか。調査の結果表はれた數字は次の如くである。

手當セサルモノ	三七七
自費醫療	一五〇
施療	四五
加持祈禱	一二
賣藥	四九
灸鍼其他	一七

茲に一言すべきは自費で醫療をうけて居ると云ふもの〻大部分は所謂實費診療であり、且それも全快まで繼續してをるものは殆んど絶無と云つてもい〻ので、大部分はごく悪い時だけ醫者にか〻るといふ狀態である。
以上で大体少額所得者の健康狀態の大要を述べたのであるが、尚此の健康狀態と直接間接の關係ある家屋の狀態その他に就いて一言したいと思ふ。
家屋の狀態に就いてすぐ目につく事は採光並びに下水排水の具合が極めて非衛生的なことである。
採光の不良な原因は、一般に新潟市の住宅密度の大なることや、家屋内の不潔なことや、强風を避けるためか折角窓があつても密閉して窓としての役に立てぬことなどにあると思ふ。
下水は如何。至る所瀦溜してをる。瀦溜せずして流るるものも落ち行く先は、市内を貫く溝渠である。東堀西堀、赤坂堀、秣川等等等。汚穢なる溝渠よ。一友人は新潟市街の繪はがきを見てオランダの大都アムステルダムを髣髴せしむると云つた。あの溝渠を流る〻汚水を見てアムステルダムが泣かなければ幸甚である。
採光の不良は種々の眼疾に影響する。又排水の不良は濕度を高めリューマチスや風邪、腎臟炎の有力なる誘因となる。但し壯年者は日中の大部分を他で過し、住宅は單に寢所に過ぎない場合が多いからこの點はよく〳〵考慮に入れる必要がある。
水に關してはたゞ一つの希望を述べる。卽ち全市民をして上水道の恩惠に浴せしめたい。今日河水をそのま〻飮用してをる者のある如きは、寧ろ大新潟の恥辱であらう。
上水、下水の不備は、傳染病流行の際に特に痛切に感ずると思ふ。
私は結論に移る。私共の調べた結果のみからでも、少額所得者の衛生狀態には幾多の欠陥が認められる。衛生知識の開發。施療機關の擴張。この二つは特に彼等の爲になされねば、ならぬ仕事と思ふ。仕事は凡て積極的で實際的でなければならぬ。山の手方面に細民健康相談の看板を掲げて納まつて居つたならば、空しく象牙の塔を守る譏を免れ得ぬであらう。須らく塔を出でゝ古町十二、十三の街頭に歩を進めるべきである。

（昭和二年一月）

308
508

終